

ヤリチン男が貞操逆転世界で 因果応報メス堕ち記録



【前立腺イキ/男潮吹き
/ラストTSわからせ】

第一章…傲慢な支配者と歪んだ朝

遮光カーテンの隙間から、冷たく鋭い朝の光がホテルのベッドルームに差し込んでいる。サイドテーブルのデジタル時計は午前八時を告げていた。

チェックアウトまで、あと二時間。

俺の下で掠れた悲鳴をあげているのは、バイト先のカラオケ店で普段は威厳たっぷりシフトを仕切っている女性店長だ。

昨夜、都合よく呼び出してホテルへ連れ込み、深夜まで散々イカせた。

そして迎えた朝。そのまま昼のシフトに出勤する予定の店長が、シャワーを浴び、新しい下着に着替え、きつちりとメイクを終えて私服のブラウスとタイトスカートを着こなした完璧な姿を見届けてから、俺は背後からベッドへ組み敷いてやったのだ。

「ん……っ、あ、ショウ、くん……っ、もう、待って……っ！ 服が……っ、ダメ、替えがないからあつ……！」

ピシッと糊のきいたブラウスにシワを寄せ、タイトスカートを無理やり捲り上げて新しい下着を横へずらす。完全に準備を整えた大人の女の無防備な

隙間へ、凶悪な肉棒を問答無用で根元までぶち込んでやった。

「待って、って言われて止まるわけないだろ？ ……せっかく綺麗に着飾ったのに、中から溢れた愛液でスカートの裏地までビショビショになっていくの、たまらないね」

激しく腰を打ち付けるたび、おろしたての下着とスカートの生地がぐちゅぐちゅと濡れた蜜で汚れていく。その無様な光景を見下ろしているだけで、底意地の悪い笑いが喉の奥から込み上げてくる。

昼間の冷徹なキャリアウーマンの面影は微塵もない。両手首を背中側で片手にまとめ、四つん這いに屈服させた姿勢のまま、俺は容赦なく背後から腰を打ち付け続けた。

「……ほら、力を抜いて。出勤前にもう一回、気持ちよくしてやるよ」

腰骨を掴んで引き寄せ、奥深くまで抉るように突くたび、彼女の喉から短い嬌声が漏れる。

自分の整った顔立ちと、女を快楽の底に叩き落とす技術には絶対の自信があった。

昼間は俺を顎で使っている年上の女が、いまや腰をくねらせ、獣のように啼きながら俺の先端を求めて貪欲に締め付けてくる。その無様な落差が、俺の歪んだ征服欲をこれ以上なく満たしていた。

「やあ……っ！ お願い、許して……っ、ほんとに、頭おかしくなっちゃう

……っ！

「ダメ……そんなに良い声で啼くなら、外で熱心に通勤してるやつらに聞かせてやりたいくらいだね」

彼女の耳元に唇を寄せ、冷酷に囁いてやる。

「ねえ、窓でも開けて聞かせてやろうか？ カーテン全開にしてさ」

「い、や……っ！ やめて……っ、それだけは、絶対にダメえ……っ！」

羞恥と恐怖に顔を歪め、喘ぎ声混じりに必死で首を横に振る女。その怯えきった反応に、俺の嗜虐心は心地よく跳ね上がった。

「ばーか。ラブホの窓なんか開くわけねーだろ……でも、すげえ締め付け。見られるの、想像しちゃった？」

「あ……っ、ちが……そんな、こと……っ！」

「嘘つけ」

嘲笑とともに、さらに体重を乗せて最奥の急所を深々と貫き通す。

「ひぎいっ……!? あ、や……っ、奥、深っ……ダメええっ！」

情けない悲鳴をあげて彼女の背中が弓なりに反り、肉壁がぎゅうぎゅうと限界を超えて脈打った。全身を激しく痙攣させながら絶頂の波に飲み込まれていく彼女に対し、俺は腰のピストンを緩めるどころか、さらに速度を上げて無慈悲に穿ち続けた。

そして彼女の耳元に唇を寄せ、冷酷に囁いてやる。

「ほら、自分がただの都合のいいセフレだって、身体でちゃんと理解しなよ」
「あ……っ、やああっ………！」

「自分が『エッチでド変態な雌犬店長』であることを叫べたら、あと一回で許してあげる」

屈辱に濡れた瞳で首を振ろうとする彼女の最も脆い急所を、逃げ場なく深々と押し潰す。限界を超えた刺激に、彼女は涙と涎をシーツに零しながら、喉を詰まらせて懇願を吐き出した。

「わ、わたしは……っ！ バイトの男の子にいいように犯されて腰振ってる、エッチでド変態な雌犬店長ですううっ………！ 昼間は偉そうに指図してるくせに、こんなハシタイない声で喘いで、奥を突かれるだけで頭がおかしくなっちゃう惨めで淫乱なメス犬です……っ！ ショウくんの言う通りにします、なんでもしますからあっ………お願い、許してええっ………！」

早口で一氣にぶちまけられた無様な告白が、静まり返った部屋の中にどこまでも響き渡る。

「よくできました」

そう言って、最後にとどめの一撃を派手に奥深くまで打ち付けてやった。

「オホオオッ………!? あ、ひぎいっ、オホッ、オホオオオッ………！」

理性を完全に吹き飛ばされた彼女は、喉を引き裂くようなみつともない絶叫を部屋中に晒した。身体を弓なりに反らせ、肉壁が締め付けてくると同時に、熱い飛沫がシーツを大きく濡らしていく。

無様に絶頂を迎えた彼女は、そのままカクカクと突き出した尻を跳ね上げ、腰を小さく痙攣させたままベッドに突っ伏した。

「ナイスな告白だったぜ、淫乱店長」

そう吐き捨てて、柔らかな尻の肉を思いつきり平手で叩いてやると、パチンと乾いた音が響き、彼女の身体がビクンと大きく跳ねた。

全身の力を失い、ぐったりとシーツに沈んでいく彼女の横顔を、俺は煙草に火をつけながら冷めた瞳で見下ろした。

女なんてものは、どれだけ偉そうにしても、結局は快楽を与えてやれば簡単に支配できる無力な生き物だ。

鼻歌交じりにシャワーを浴び、手早く髪を整えてシャツのボタンを留める。鏡に映る自分は、相変わらず非の打ち所がない。

ベッドの上では、彼女がまだ腰を抜かしたまま、震える指先でシーツを握りしめていた。

「じゃ、また連絡しますね。遅刻しないようにしてくださいね。店長」
それだけ告げ、振り返りもせずにはホテルの部屋を出る。

ホテル代を置いていく気なんて毛頭ない。女なんてものは、都合よく転がして、気持ちよくなればそれでいい。

世界の中心で主導権を握っているのは、いつだってこの俺だ。その時の俺は、本気でそう信じ切っていた。

気だるい日差しを浴びながらアパートの階段を上がり、鍵を差し込む。

今夜もカラオケのバイトが入っている。それまでベッドに倒れ込んで泥のように眠るつもりだった。

ガチャリとドアを開け、薄暗い玄関で靴を脱ぎ捨てようとしたその時。視界の隅に、絶対にそこにあるはずのない異物が飛び込んできた。

「うおっ……!?」

心臓が跳ね上がり、思わず短い悲鳴が喉から漏れる。反射的に半身を引いてドアノブを握り直した。

カーテンを閉め切った暗いワンルームの真ん中。

埃の舞うフロリングの中央に、床まで届く深い藍色のローブをまとった人影が、物音ひとつ立てずにずっと佇んでいた。

部屋の空気がそこだけ澱み、現実感が異様に削ぎ落とされている。

（誰だ……？ 空き巢か？ 強盗……？）

頭の中で警戒アラートがけたたましく鳴り響く。

だが、目を凝らして観察すると、その人影は小柄で、男のような威圧的な骨格ではない。

……女か？

武器を構えている風でもなく、こちらへ襲いかかってくる気配もない。ただ、静まり返った部屋の闇に溶け込むように佇んでいるだけだった。

不気味すぎる。だが、相手が小柄な女一人なら、力で負けるはずもない。俺は頭の芯を冷やしながらポケットの中のスマホを素早く取り出し、画面を見ずに緊急通報のボタンへと指を滑らせた。

「……おいおい、俺のファンにしては悪趣味すぎるだろ。鍵、どうやって開けた？」

呆れ混じりに皮肉を投げ、そのまま通報ボタンを押し込もうとした、その瞬間だった。

空気が、凍りつくように重くなる。

見えない糸で全身を縫い留められたかのように、指先ひとつ動かせない。

画面に置いた親指がピクリとも動かず、喉仏が強張って声も出ない。床に張り付いたまま、呼吸だけが浅く乱れていく。

「不法侵入を咎める権利は、あなたにはないはずですよ。他人の境界を踏み躪ることに、随分と慣れていらっしゃるようですから」

低く澄んだ、硝子を擦り合わせるような美声。

人影が細い指先でフードに触れ、音もなく滑り落とした。

露わになった相貌に、俺は息を呑んだ。

陶器めいた白い肌、怜悧な光をたたえた莖色の瞳、そして布地の上からでも主張を隠せない、息が詰まるほど豊満な胸のふくらみ。今までベッドを共にしてきたどんな女とも格が違う、圧倒的な美貌だった。

金縛りに遭ったままの俺の喉が、引き攣ったように微かな音を立てる。

美女は物音ひとつ立てずにずっと距離を詰めると、全身を固まらせた俺の身体を、まるで骨董品でも愛でるような冷徹な視線で値踏みするように舐め下ろした。

「ふうん……滑らかなお肌に、女性みたいに美しいお顔……身体も細いんで

すね。でも、お腹はちゃんと腹筋が割れていて……素晴らしいですね」
低く甘い吐息とともに、冷たい指先が俺の頬をなぞり、首筋から胸元、そして薄いシャツの上から腹筋の起伏へと滑り落ちていく。
触れられた部分から氷のような冷氣と、甘い痺れが全身へ侵食していくようだ。抵抗したいのに指一本ピクリとも動かず、ただ女の思うままに撫で回される屈辱に、背筋を嫌な汗が伝う。

美女は俺の手から、通報画面を開いたままのスマホをいとも容易く抜き取ると、滑らかな手つきで床の上へそっと置いた。

「ふふっ……楽しめそうですね」

彼女は冷たい指先で俺の顎をそっとすくい上げ、形の良い唇を妖艶に歪めてくすりと笑った。

「桐島シヨウさん」

名前を呼ばれた瞬間、心臓を直接鷲掴みにされたような悪寒が走る。初対面の不法侵入者が、なぜ俺の素性を知っているのか。

「あなたは女性の扱いが随分と乱暴ですの、少々、女性の気分を体験していただこうかと」

「……は、何を言っている……っ」

恐怖と混乱を振り絞り、皮肉で返そうとした唇は、瞬時に塞がれた。

重なる熱い唇と、隙間をこじ開けて口内へ滑り込んできたのは、滑らかな女の舌だった。

（ふざけるな……っ！　どこの誰とも知れない女のキスなんか、感じてたまるかつ！）

これまで幾多の女をその気にさせ、翻弄してきたのはいつだって俺の側だ。女に主導権を握られ、一方的に貪られるなど男としての自尊心が許さない。奥歯を噛み締め、無理やりにも舌を押し返してやろうと試みる。

だが、金縛りで硬直した肉体は、俺の意志をあっさりと裏切った。

口腔の奥深くまで侵入した彼女の舌先が、歯列を舐め上げ、上顎の最も過敏な天井を執拗になぞる。強引に巻き取られ、絡め捕られた俺の舌は、抵抗するどころか熱い摩擦に晒されるだけで、ピクピクと快感に震え出してしまった。

ただのキスのはずなのに、まるで口の中から全身の神経を直接まさぐられ、骨の髄まで犯されているかのような感覚。

「んっ……ふ、あ……っ、んむ……っ！」

（やめろ……っ、離せ……っ！　こんな、女相手に……っ！）

頭の中では必死に拒絶のを叩きつけているのに、首筋から背骨へと甘い痺れが奔流となって駆け巡り、膝の力が急速に抜けていく。

口元を完全に塞がれ、肺の中の空気が容赦なく奪われていく。

息を吸おうとすれば、代わりに流れ込んでくるのは彼女の甘い白檀の吐息と、熱く粘り気のある唾液だけだ。

酸素の欠乏と強烈な快感の波に、思考が急速に白濁していく。

視界の端から輪郭がぼやけ、床を踏みしめていたはずの足元の感覚が、ふわふわと宙に浮くように遠のいていく。

「素直でよろしいこと……それでは、良い旅を」

酸欠で薄れゆく意識の淵、耳元で艶然と囁かれた声を最後に、俺の視界は底なしの闇の中へと心地よく溶けて落ちていった。

意識が浮上する。

肌を撫でたのは、いつもの安アパートで、毛玉だらけのシーツの感触。

そして薄暗いフロアリング。見慣れたはずのワンルームだが、漂う空気だけは一変していた。

「……目覚めはいかがですか？」

すぐ傍らから響いた涼やかな声に、弾かれたように身を起こした。

ソファに悠然と腰掛けているのは、先ほど俺の唇を奪ったあのローブ姿の美女だ。足を組み替えた瞬間、めくれたローブの裾から、眩しいほど白い太ももと純白のショーツがちりと覗く。

「……っ、あんた、まだ居座ってたのかよ」

頭の芯に残る微かな痺れを振り払おうと、首を傾げて強がりの笑みを浮かべてみせる。

「催眠商法にしちゃ手が込んでるし、拉致未遂なら今度こそ警察呼ぶぜ？」だが、彼女は慌てる風もなく、形の良い唇を弧を描くように緩めた。

「呼んでも無駄ですよ。ここはあなたがいた場所とは似て非なる世界……性の役割と貞操観念が、綺麗に逆転した世界ですから」

「……は？ 貞操逆転？」

突飛な単語に眉をひそめる俺を、彼女は莖色の瞳で見つめながら淡々と紡いだ。

「ええ。この世界は、女性が男性を『食う』ために必死で頑張る世界なんです。仕事をバリバリこなし、稼ぎ、可愛い男の子を口説き落としてベッドで貪る……それが女性の甲斐性。そして男の子は、恥じらいを持って慎ましくその身を守り、清らかさを保つのが美德とされています」

「……」

何を馬鹿なことを言っているんだ、こいつは。

壮大な冗談を聞かされているような顔で固まる俺を見て、彼女は小さく「ふふっ」と喉を鳴らして笑った。

「あまりピンときていないようですね。……要するに、男は女に犯される生き物という立場になった、といえばおわかりですかね？」

淡々と語られる荒唐無稽な講釈に、俺は思わず吹き出しそうになった。要するに、女側からガツガツ来てくれる世界ということか？

（簡単にいえば……女とやるために機嫌を取ったり、わざわざ口説き落としたりする面倒な手間が一切いらなくてことだろう）

元の世界で例えるなら、男の俺が「エッチしようぜ」と誘う行為は、この世界では『無防備な女が自分から股を開いて誘惑してくる』のと同じ扱いになるわけだ。そんなの、都合のいいヤリマン女そのものじゃないか。

「……ってことはさ。俺がちよつとその気を見せるだけで、女とやり放題ってことじゃね？」

男が犯される側だの何だのという小難しい警告は右から左へ聞き流し、俺はベッドの上で気だるげに身を乗り出した。これまでの経験上、女なんても

のは余裕を見せて転がせばいくらでも思い通りになる。

そんな俺の浅はかな慢心を見透かしたように、彼女は形の良い唇を妖艶に歪めて微笑んだ。

「ええ、そうですね。例えば元の世界で、可愛い女の子があなたの目の前にやってきて、突然『抱いて』とおねだりしてきたら……あなたなら、喜んで抱くでしょう？」

「そりゃあな。タダで食べるごちそうを逃す男なんていないだろ」

「ふふっ。つまりこの世界において、男性はまさに『そういう立場』になったということです。……これでおわかりいただけましたか？」

彼女は怜悯な瞳で、俺の胸元から腰のラインを品定めするようにゆっくりと舐め下ろした。

その冷たい視線に一瞬だけ背筋がゾクリと粟立ったが、俺はすぐにそれを都合のいい武者震いだと解釈し、値踏みするように彼女の豊満な胸元を見つめ返した。

「じゃあさっそく、あんたとしていたんだけど……どう？」

ベッドの端に手を掛け、いつものように甘く低めのトーンで誘いかける。どんな女も落としてきた自信作の笑みを貼り付けたまま、俺は彼女の反応を待った。

「私と、ですか？」

彼女は動じるどころか、どこか哀れむような慈愛の笑みを浮かべる。

すっと胸元に伸ばされた細い指先が、フロントのボタンを優雅に外した。

さらりと左右に割れた布地の間から、零れ落ちるように露わになる胸。

ブラをつけていない白く柔らかな果実が、重力に従ってぶるんと豊かに揺れた。先端に灯る淡い桜色の突起まで惜しげもなく晒され、あまりの柔らかそうな質感に思わず喉が鳴る。

(……おいおい、マジかよ。この世界が本当にそういう世界なら……こんな極上の美女ともやりたい放題ってことじゃねえか)

「……っ」

息を呑んだ俺の耳元に、彼女は音もなく顔を寄せ、微熱を帯びた吐息とともに妖艶に囁いた。

「残念ながら、私は貞操逆転していない『元の世界』の理を知っているものですから……元の世界では、そう簡単に女は股を開かないでしょう？」

「……へえ。綺麗な顔して、随分とはつきり言うんだな」

目の前の凶悪な胸元の引力に当てられ、俺は余裕を崩さずにふっと笑ってみせた。

「ふふっ。なので今はやめておきましょう。この世界で一週間生活をしていただいた後、あなたがどうしても『されたい』とおっしゃるなら……私はいつでも、身体をお貸ししますよ？」

「……されたい？」

妙な言い回しに眉をひそめると、彼女は露わにしていた豊満な胸元を優雅な手つきでしまい、ふと思い出したように床に置いてあった俺のカバンへと歩み寄った。

そして、迷いなくジッパーを開け、中をささっと漁り始める。

「おい、なにしてんだ？ 金でも盗む気か？」

「いえ……あ、ありました」

細い指先でつまみ上げられたのは、カバンのポケットに忍ばせてあった四角いアルミパウチ、コンドームだった。

「こちらは私が預かっておきますね」

「は？ なんでだよ、やるとき必要じゃねーか。返せよ」

当たり前の権利を主張するように手を伸ばす俺を見つめ、彼女はどこか哀れむような、艶やかな微笑を浮かべた。

「ふふっ。だって、この世界に『これ』はないのですから」

「……は？」

その意味を問い返そうとした瞬間、目の前の光景が陽炎のように激しく揺

らいだ。瞬きをひとつした隙に、豊満な美女もその声も、煙のように掻き消えていた。手元のスマホにはバイトの出勤時間を告げるアラームが鳴り響いている。

「……されたい、ねえ。それに避妊具がないって、どういう意味だよ」

呆氣にとられながらも、先ほど見せつけられた凶悪な胸の感触を思い出し、口角を吊り上げる。女の方から求めてくる世界なら、俺にとってはただの天国だ。都合のいいハーレムが待っているだけに決まっている。

「ま、女から寄ってくる世界なら大歓迎だ。せいぜい楽しませてもらうとするか」

これまでの傲慢なプライドと男としての身体が、これからどんな手厚い愛撫によって無残に蹂躪されるかも知らずに、俺は夜勤のバイト先へと軽快な足取りで向かった。

第二章…反転した世界と狩られる獲物

深夜二時を回ったカラオケボックスのバックヤード。

重厚な防音扉に遮られたストックフロアには、客の歌声も喧騒も届かず、換気扇の低い唸りだけが規則正しく落ちていた。

段ボールが乱雑に積まれた薄暗い空間の片隅。

備品のグラスを柔らかなクロスで磨いていた小春が、俺の忍ばせた足音に肩を小さく跳ねさせる。

「ひゃっ…あ、シヨウ先輩、お疲れ様です…っ」

肩口で切り揃えられた黒髪のボブが揺れ、おどおどと上目遣いにこちらを伺う潤んだ瞳。制服のサロンエプロンに埋もれそうな華奢な肩や、小動物のように頼りなげな佇まいは、元の世界にいた頃と何ひとつ変わっていないように見えた。

深夜のバックヤード、うら若き男女が二人きり。

いつもの気だるい調子で棚に背を預け、俺はネクタイを少しだけ緩めてみせる。

「小春ちゃん、大丈夫なの？ こんな深夜のアルバイトなんてさ」

この店の深夜帯は防犯上の理由から、体力のある男スタッフを中心にシフ

トが組まれるのが暗黙の了解だった。

酔っ払い相手の無用なトラブルを避けるためにも、こんな小柄な女の子を深夜に立たせるなんて普通はさせない。

だが、俺の氣遣わしげな視線を受け止めた小春は、困惑したように目を丸くし、それから心細そうに眉を八の字に下げた。

「えっ……？　そ、それはこちらの台詞ですよ……シヨウ先輩こそ、本当に深夜のシフトなんて入って大丈夫なんですか……？」

「は？　大丈夫って……俺は別に、体力的にも余裕だし」

「でも……っ」

小春は磨きかけのグラスをそっと作業台に置き、小さな手をエプロンの前でぎゅっと握りしめた。伏せられた長い睫毛が、薄暗い照明の影を落として微かに震えている。

「力仕事だっただいですし……酔ったお客様に絡まれたら危ないじゃないですか。寝不足でお肌が荒れちゃったりしたら大変ですし……男の子なんですから、もっとご自身のお身体を大事にしてください……」

消え入りそうな声で紡がれる、本気の心配と庇護の眼差し。

その瞳に宿る純粹な労わりに触れた瞬間、俺の脳裏にあのパートでの美女の言葉が蘇った。

（そうか……）

この世界は、女が外で汗を流して働き、男を守り養う世界なのだ。

つまり、今の俺が深夜の店内で立ち働いている姿は、元の世界で言えば『深夜の治安の悪い街で、か弱い女の子が無防備に夜勤をしている』のと同じように見えているわけだ。

それなら、この頼りなげな後輩が、まるで壊れ物を気遣うような顔で俺を見つめてくる理由もよくわかる。

世界がまるごと裏返ったのだという奇妙な実感が、静まり返ったバックヤードの冷たい空気とともに、じわりと肌を撫でていった。

「小春ちゃん、俺の心配をしてくれてたんだ。ありがとね」

「い、いえ……男の子を気遣うのは、女の役目ですから」

「でも、そんなに根詰めると疲れちゃうよ？」

「で、でも、深夜のうちに検品を終わらせておかないと、社員さんに怒られちゃいますし……」

伏せられたまつ毛が、微かに震えている。どこをどう切り取っても、からかい甲斐のあるウブな後輩女子そのものだ。

俺は口元に余裕の笑みを浮かべ、距離を詰めて彼女の華奢な肩へそっと腕を回した。こうして耳元に吐息をかけながら引き寄せてやれば、大抵の女はその気になって身体を預けてくる。

「どうせ防音なんだし、サボっちゃえばいいのに……ねえ、せっかく二人き

りなんだし、ちょっとえっちなことでもする？」

元の世界なら「もう、からかわないでくださいよ」と赤面して拗ねる程度の、ただの軽い冗談。

だが、返ってきた小春の反応は、こちらの予想を遥かに超えて異常なものだった。

「――っ!？」

持っていたグラスを手から滑り落としかけ、慌てて抱え込むようにして、耳まで真っ赤に染め上げた小春が飛び退いた。

その潤んだ瞳には、強烈な羞恥と同時に、まるで純潔な令嬢が破廉恥な痴漢を目の当たりにしたかのような、純粹な戦慄と戸惑いが宿っている。

「な、な、何を言っているんですか先輩……っ! じよ、冗談きついですよ……っ!」

「冗談じゃないって。小春ちゃん、抱きたいなあ」

動揺する姿すら可愛らしく見え、俺はさらに調子に乗って甘く囁きかける。
「せ、先輩……!!」

小春は胸元を両腕でぎゅっと隠すようにかばい、今にも泣き出しそうな顔で、上擦った悲鳴をあげるのだった。

「あ、あの……っ! 男の人が、自分からそんなハシタイないこと言っちゃ

駄目ですよ……っ！」

「……は？ ハシタイない？」

思わぬ単語のチョイスに、俺は喉の奥で引き攣った笑いを漏らした。

男に対して「はしたない」とはどういう見だ。だが、胸元を手で覆い、今にも泣き出しそうな顔で俺を諫めようとするその無防備な姿は、どうしようもなく男のサディズムを刺激してくる。

「そんな……お肌も白くて、綺麗なお顔立ちをしてるのに……っ。男の人はもっと自分のお身体を大切にしなければ駄目だって、教わらなかったんですか……？」

「おいおい、小春ちゃん。誰に何を教わったか知らないけどさ」

異世界がどうのという能書きを思い出しつつも、目の前でプルプルと震える小柄な後輩を見て、俺の慢心は完全に息を吹き返していた。

女が上で男が下？ そんな力関係なんてものは、ベッドの上で教えてやれば一瞬で覆る。

「そんなに心配してくれるなら、俺の身体……好きにしていいいよ？」

一歩踏み込み、壁際に追い詰めるように見下ろしてやる。

「ほ、本当に……いいんですか……？ 男の人を乱暴に扱っちゃいけないって、家庭科でも保健体育でも厳しく教わってるんですけど……」

（——っしやあ！ マジかよ！）

俺は心の中で派手にガッツポーズを決めた。

普段ならどれだけ口説いても靡かなさそうな、あのガードの堅い小春ちゃんですら、こんなにあっさりエッチに持ち込めるなんて……本当に最高の世界じゃないか！

小春は困り果てたように眉を八の字に下げ、おずおずと白い指先を俺のシャツの裾へ伸ばしてきた。

今にも消え入りそうな声、潤んだタレ目。制服のベストの下で小さく上下する薄い胸板。どこからどう見ても、これから初めての経験に怯える小動物そのものだ。

「いいよ。先輩に全部任せな——」

言い終えた直後、小春のおずおずとしたぎこちない指先が、ベスト越しにそっと俺の身体へ触れてきた。

震える指先が腰のくびれをなぞり、薄いシャツ越しに胸板へ、そして戸惑うように首筋へと這い上がってくる。

そのあまりに拙く緊張した手つきに、最初は「可愛いもんだな」と内心で笑いをこらえていた。ウブな後輩女子の初々しい愛撫。そう受け止めて、余裕たっぷりを受け流すつもりだったのだ。

だが、触れられているうちに、じわりと奇妙な違和感が皮膚の下から這い

上がってきた。

くすぐったいような、下腹部の奥がむずむずと熱を帯びていくような落着かない感覚。決して手慣れた愛撫ではないはずなのに、なぜか神経の端々が異様な過敏さで覚醒し、触れられた部分から熱い電流がじんわりと広がっていく。

（……なんだ？ 小春ちゃんがあまりにウブで可愛らしいから、俺の身体も変に反応しちゃってるのか……？）

自分の経験則で無理やり納得させ、平静を装おうとした、その瞬間だった。小春の指先がシャツの布地越しに乳首をツンと微かにかすめた。

「——っ!? ん あっ……!?」

瞬間、背骨の髄を直接プラズマで撫で回されたような強烈な痺れが駆け抜けた。ただ布越しに指が掠めただけだというのに、頭の芯が真っ白になり、情けない嬌声とともに膝の力がふっと完全に抜け落ちる。

「あ、シヨウ先輩、急に動いたら危ないですっ……!!」

立っていられず崩れ落ちかけた俺の身体を支えようと、小春が慌てて両手を伸ばす。

そのままバランスを崩し、ドサリと段ボールの山に押し倒される形になっ

た。覆いかぶさってきた小春の重みは驚くほど軽い。だが――。
「……っ、おい、ちょっと待て……離せ……っ」

咄嗟に身を起こして体勢を入れ替えようとした俺の両手首を、小春の細い右手がやすやすと纏めて頭上へ縫い留めた。

万力で締め上げられたかのように、びくとも動かない。華奢で小柄な見た目からは到底信じられない、圧倒的な筋力差。

（なんだこれっ!?! 力が全然入らねえ……ビクともしねえぞ……っ!?!）

「ご、ごめんなさい……っ! 男の子は骨も関節も繊細だから、暴れて怪我をされたら大変だと思って……」

怯えたような表情でペコペコと頭を下げながらも、手首を拘束する握力には微塵の緩みもない。

そして彼女の空いた左手が、するりと俺のネクタイを解いた。

パチパチとワイシャツのボタンが二つ外され、露出した鎖骨の窪みを、ひんやりとした指先が円を描くように撫でていく。

「ひあ……っ、ん、な……っ!」

ただ指腹でなぞられているだけなのに、信じられないほどの熱が皮膚の下で爆発した。背筋をチリチリと焼き焦がすような痺れが走り、奥歯を噛み締めても喉から甘い吐息が零れ落ちる。

（や、やべえ……っ! なんだこれ、なんでこんな……っ!?!）

いつもなら自分が女に施し、啼かせていたはずの愛撫。それが今、寸分の狂いもなく急所を捉え、自分の身体を内側から狂わせていく。

恐怖と羞恥に心臓が早鐘を打つが、それ以上に肉体が裏切り、快樂の波に呑み込まれそうになっていた。

「こ、小春……っ！ 冗談、だろ……っ、手、どけろって……っ！」

「先輩、そんなに息を荒げて……っ。痛いですか？ でも、男の子はここをほぐしてあげると安心するって、授業で……」

「授業ってなんの授業だよ……っ！ 感じてねえ……っ、こんなので、俺が……っ、ひやうっ!?」

強がりを吐き捨てようとした瞬間、小春の指先が鎖骨から胸元へと滑り、剥き出しになった乳首を爪の先でツンと弾いた。

「あ、あ……っ！ んんっ……!!」

頭の芯が真っ白に弾け飛ぶ。

腰が反射的にビクンと跳ね上がり、両手首を拘束されたまま、俺は背中を擦り付けて悶絶した。

脳内で、かつて味わったことのない快感が警告音を鳴らし響いていた。

「あ、お首のここ……すっごく赤くなってます。男の人って、やっぱりこんなに感じやすいんですね……」

「や、め……っ、小春、お前……っ、触り方が、異常だろ……っ！」

「えっ……？　こ、これ、男の子を落ち着かせるための、一番基礎的なマッサージなんですけど……っ。痛かったですか……？」

本気で心配そうに瞳を潤ませながら、小春の指先は無慈悲にスラックスのベルトへと滑り落ちていく。

悪意など微塵もない、純粹無垢な保護欲と愛護精神。だからこそ逃げ場がない。

「壊さないように……すっごく優しく、大切にしますからね……っ」

耳元に落ちてきた震える吐息と石鹸の甘い香りに、俺のプライドは音を立てて軋み始めていた。

ベルトがカチャリと外された瞬間、俺の理性の防壁は完全に決壊した。

スラックスと下着が無造作に引き下げられ、フロアの冷たい空気が熱を持った下腹部を撫でる。白シャツは胸元までだけ、ネクタイを握られたまま床に押し倒されている自分の姿は、どう見ても略奪される側のそれだった。

「や、やめろ……待って……っ！　俺が、上だつたはずだろ……っ!?」

「ショウ先輩、そんなに腰を浮かせたら危ないです……っ。男の人は、力を抜いて受け入れるだけでいいんですよ？」

小春はおどおどとした手つきのまま、しかし一切の迷いなく、俺の最も肉棒へと指を這わせた。

震える頼りない指先のはずなのに、触れられた途端、下腹部の奥底で信じ

られない熱の波が跳ね上がる。付け根から敏感な筋、先端の割れ目に至るまで、的確すぎる圧と絶妙なスピードで転がされ、脳髓が痺れ上がった。

「ひあ……っ、ん、あ……っ！ ま、待て……っ、待て……っ！」

おどおどした気弱な表情からは到底信じられない超絶技巧に、情けない喘ぎ声が喉からとめどなく溢れ出す。必死に腰を引こうと藻掻くが、手首を押さえ込まれたままでは逃げ場すらない。

そんな俺の無様な焦り顔を見つめ、小春はタレ目を真剣に引き締めると、まるで大事な試験に臨むかのように小さく鼻を鳴らした。

「先輩、怖がらなくて大丈夫ですからね……！ 私、不器用ですけど精一杯頑張りますから……っ！ 先輩のこと、いっぱいいいっぱい気持ちよくさせてあげます……っ！」

「がんば……っ!? ちょ、気合い入れんな、やめ——っ!!」

純粹無垢な熱意に満ちた宣言とともに、小春の指先がさらに容赦のない速度とリズムで急所を攻め立て始めた。

引き下げられた下着の隙間から、小春の細い手が俺の肉棒をするりと引っぱり出す。度重なる愛撫によって、すでに限界まで熱を持ってビンビンに勃起していた。

「わあ……すごく素敵ですね、先輩」

小春は目を輝かせ、心底感心したようにうっとり見つめてきた。